

# 明治期における和田岬砲台



## ごあいさつ

史跡和田岬砲台の修理事業は、外郭石造部の目地修理などが終わり、現在は内部木造部の修理と復元が進められています。

このたびの「平成の大修理」にあわせて、史跡としての和田岬砲台の重要性を知っていただくためにこれまで3回の講演会を開催してまいりました。和田岬砲台について、「その概要と周辺の砲台・台場」、「砲台築造に関わった人たち」、「世界史から見た砲台の源流」、「幕末の沿岸防備—品川御台場からみた和田岬砲台」と、さまざまな角度から見てきました。今回は、明治時代になり、当初の役目を終えた和田岬砲台のその後について、明治新政府による大坂湾防備とからめて見ていこうとするものです。

最後になりましたが、今回の講演会開催にあたり多大なご協力を賜りました三菱重工業株式会社神戸造船所・財団法人建築研究協会・株式会社藤木工務店・ひょうご観光ボランティアの皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成23年12月24日  
神戸市教育委員会  
神戸市兵庫区役所

- 明治初年における大阪湾防備と和田岬砲台 ----- 角田 誠  
(城郭談話会)
- 史跡和田岬砲台の修理工事 ----- 伊藤 誠一郎  
(財団法人建築研究協会)
- 〈コラム〉 現れた砲台の床面 ----- 松林 宏典  
(神戸市教育委員会)

編集：丸山 潔 (神戸市教育委員会)

# 明治初年における大阪湾の防備と和田岬砲台

角田 誠

## 1. はじめに

江戸幕府は陸軍の近代化と強化をフランスに依頼していたが、明治新政府も陸軍の近代化を引き続いてフランスに依頼した。明治5(1872)年4月、シャルル・マルクリー(Charles Marquerie)中佐を団長とする軍事顧問団16名が横浜に到着した。マルクリーらは日本の軍備強化の一環として、海岸防禦の必要性を説き、同6年に「海岸防禦方案」を陸軍省に提出する。翌7年、病気のために辞職したマルクリーの後任として、やはりフランスからシャルル・ミュニエ(Charles Munier)中佐が来日した。ミュニエは黒田久孝少佐、牧野毅少佐らと共に日本各地の海岸を巡視し、翌8年に「日本国南部海岸防禦方案」を提出する。ミュニエらの方策に基づいて、日本の沿岸築城が開始されたのである。沿岸築城は、先ず東京湾要塞から開始することとし、翌9年に観音崎・富津・猿島の三砲台の図面と建設経費の見積もりを提出している。

明治13年5月に観音崎第二砲台の築造が着手され、続いて観音崎第一砲台、観音崎第四(後の第三)砲台、猿島砲台、富津元洲砲台、および東京湾海中の第一海堡などの築造も開始された。これらの砲台は、第一海堡を除いては同17年6月に竣工している。また、東京湾要塞に引き続いて、明治20年に対馬要塞と下関要塞、同22年に由良要塞の建設が開始され、更に日清戦争(明治27年～8年)に勝利した後の、同30年には芸予、鳴門、佐世保、舞鶴の各要塞、翌31年には長崎、函館要塞などの築造も開始され、明治期要塞築造の最盛期を迎えたのであるが、それらの完成を期にして日露戦争(明治37年～8年)へと向かっていったのである。

すなわち、由良要塞は明治22年3月に生石山第一砲台から建設が着手され、同年9月友ヶ島第一砲台、同25年1月に深山第二砲台の建設などが開始されて、大阪湾防禦のための近代要塞が建設されたのである。しか

しながら、明治維新から近代要塞建設までの20数年間の大阪湾の防備はどのような状況にあったのであろうか。ここではそのあたりの事情について考えてみたい。

嘉永7（1854）年にプチャーチンの乗った露艦が大阪湾に侵入したことを機に、安政年間（1854～1859）頃から海防目的で大阪湾岸に台場群の築造が開始され、順次整備されながら文久～元治年間（1861～64）頃にその最盛期を迎えている。しかしながら、兵庫開港（慶応3年、1867年）によってその大部分は用を無くして明治維新を迎えている。

明治新政府では、これら旧砲台（明治期陸軍は在来の「台場」を正式に総て「砲台」と呼称する）は、一旦は陸軍省管轄とするが、明治6年1月14日付の太政官達書（いわゆる「城郭ノ存廢に関する達書」）によって、その大部分は大蔵省に移管される。この「城郭」には、「軍事ニ関涉スル地所建物」も含まれ、言うまでもなく「砲台」はこれに該当した（「全国城郭及ヒ軍事ニ関涉スル地所建物是迄陸軍省管轄ノ処今度別冊第一号ノ通り陸軍必要分改テ同省管轄被仰付其余第二号ノ通り旧来ノ城郭陣屋等被廢候条付属ノ建物木石ニ至ル迄総テ其省へ可引渡ニ付同省ヨリ受取りタリ上処分スヘシ」）。

なお、この時に存続の許された城郭は、大阪湾周辺では大坂城、和歌山城、徳島城、姫路城で、これに兵庫城の新規築城が認められたのみであった。それ以外の城郭は、次々と民間等に払い下げられ、大部分は破却されていたのである。

しかし砲台に関しては、明治8年1月25日付けの太政官達書で、「全国海岸旧来ノ砲台陸軍省所轄ヲ除ノ外追々取崩或ハ開墾等致候向モ有之候処追テ全国防禦線確定マテハ従来ノ儘存在可致此旨相達候事」とあって、全国の防禦線、つまり「海岸防禦策」が確定するまでは、破却・改変等は一旦中止され、とりあえずは現状保存されることになったのである。従ってここでは、これら「従来ノ儘存在」の決定した旧砲台のうち大阪湾およびその周辺に位置する主なもの、すなわち天保山砲台、摂海石堡塔、泉州堺砲台、紀州藩旧砲台、淡路旧砲台等の明治維新以降の履歴から、明治初年における大阪湾の防備状況を考えてみることにする。また、その中での和

田岬砲台の役割等についても考えてみる。

## 2. 天保山砲台

明治維新当時、大阪湾防御の中心をなした砲台は天保山砲台であった。しかし大阪に恒久的な砲台が築造開始されるのは上記した露艦の大阪湾来航後の、安政年間以降であった。天保山砲台は、大坂城代土浦藩土屋家によって、「安治川口台場」あるいは「目標山（目印山・めじるしやま）台場」と呼ばれながら築造が開始され（写真1）、引き続いて松江藩や鳥取藩、大



写真1  
目印山御台場之図  
[土浦藩土屋家文書、国  
文学研究資料館蔵]

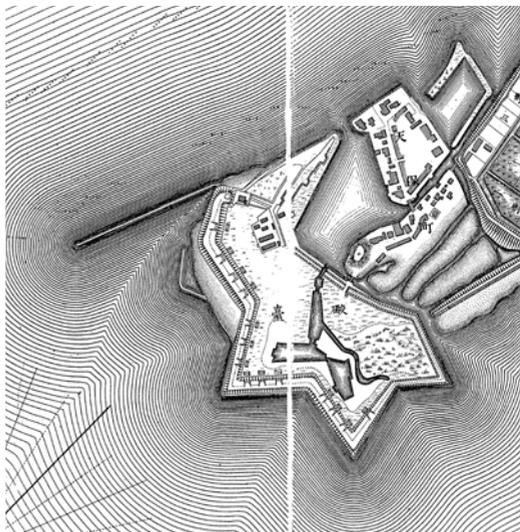


図1  
天保山砲台  
「大阪実測図」(5千分の1、明治21年)  
[内務省地理局発行]

坂町奉行所などの手によって、最終的には稜堡式の「目標山台場」が完成したのである（図1）。

#### （1）目標山から天保山へ

例えば、『陸軍省大日記』所収の「24 斤砲照尺及照星御渡ノ儀伺」には、「蘭式二十四斤砲照尺十一、同照星十一、目標山砲台二十四斤砲十二門備付、照尺照星一個ハ在来、明治十二年八月八日」とあり、また「目標山砲台備付二十四斤堤砲車拾ヶ所修理ノ義ニ付伺」には、「蘭式二十四斤堤砲車拾式座（中略）摩滅ニ付修理、明治十二年十一月十一日」とあって、明治12年段階には少なくとも24ポンド砲が12門、ここに配備されていたことがわかる。当時の24ポンド砲は、口径約6インチ（15センチ）、砲身長約3.5～4メートル、重量2～2.5トンであった。現在、大坂城に展示されている青銅砲は明治3年に目標山砲台から移設され、大正年間まで号砲として使用されたものと言われている。

また、大阪工兵第四方面（本署は大坂城内）から提出された「目標山砲台石垣等修繕伺」に、「本月（明治十三年九月）十五日暴風之為メニ目標山砲臺石垣土塁トモ大破セリ」とあって、石垣・土塁等の修繕が行われている。そして、同15年にも同様の修繕が行われ、また大砲砲架の修理が同17年等に行われていて、少なくとも砲台や備砲は常に使用可能の状態に置かれていた。しかし、備砲の二十四斤砲は礼砲として使用されることが多く、実弾射撃は殆ど実施されなかったようである。しかも、「神奈川砲台礼砲用二十四斤砲不良ニ付引換」（明治14年4月7日）において、うち2門が神奈川砲台の礼砲として撤去移設されたことが記されている。

#### （2）天保山砲台として存続

明治19年に目標山砲台の天保山砲台への名称変更が認められ、以降は天保山砲台として存続してゆく。天保山砲台となってからも崩壊部の修理はその都度行われたが、その反面、砲台内の老朽化した建物は修理されずに処分が開始される。また、砲台用地の貸し出しも「土地有用之際ハ早速ニ取除キ返地スヘキ」と条件付きで認められるようになった。

砲台の修繕に関しては、例えば「本年（明治21年）八月三十日夜暴風之

為メ外斜面并ニ咽喉部外門脇側石垣崩壊及北方入口門転倒致シ候、且ツ水門脇側石垣之義モ咽喉部胸墻追々崩落致候ニ付、差当り此ニケ所修繕之見込」とあり、また同 26 年に天保山灯台（明治 5 年に砲台の西北端に設置）附近の石垣の崩壊に伴う修理などが行われている。

建物処分に関しては、「天保山砲台元衛戍会々舎及ヒ付属家トモ公費ニ付スヘシ（明治 20 年）」というのがあり、用地の貸し出し等に関しても「借地内へ紙及布海苔製造之為メ堀立ノ仮家十棟取設旨借用人ヨリ願出候（明治 21 年）」というのものや、「大阪府ニ於テ警察官射的演習用射的場」として砲台内に「的阜及射門ヲ設ケ射的演習為致度御照会有之候（同年）」という願書の提出があり、「有用之節ハ速ニ取除可致筈ニ付差許可」とされている。

### （3）日清戦争と天保山砲台

朝鮮半島を巡って清国との緊張が高まり、ついに明治 27 年 8 月 1 日に「征清の詔」が発せられると、臨時的にはあるが急遽大阪湾の海防も厳にする処置が取られた。前記したように、明治 22 年から由良要塞の築造が着手されていたが、加太・男良谷・深山第一・友ヶ島第二、第五などの各砲台や、堡壘（陸正面の砲台）などは未完成で、由良要塞司令部も開庁前であったので、在来の旧砲台である天保山砲台等が臨時的に戦闘配備につくことになった。

「大阪湾臨時防御之為海岸砲据付方左之通取計フヘシ」とあって、「二十八  
珊米榴弾砲四門 但内二門ハ隠顕砲架ニ載架ノ分 一門ハ大津川ニアル分  
右北島新田砲台へ」、「二十八珊米榴弾砲 八門 但内六門ハ生石第一砲台  
引当ノ分二門ハ生石第二砲台据付ノ分 右天保山砲台へ」、「二十八珊米榴  
弾砲 四門 但生石第二据付ノ分 右布屋新田砲台へ、明治廿七年八月十五日」とある。

つまり、大阪砲兵工廠にて明治 17 年に試製し、同 20 年に制式化され量産された 28 センチ榴弾砲のうち、由良要塞生石山砲台に備え付け、あるいは備え付け予定の分などが天保山砲台などに配備されたのである。

明治 27 年 8 月 9 日付の「大阪湾臨時防禦計画」によると、その編成は表 1 のとおりであった。

表1 臨時大阪守備砲兵隊編成表（部分）

砲台名	砲種	砲数	将校	下士	兵卒
天保山砲台	28 榴弾砲	8	佐官 1	18	162
	野砲	4	士官 3	4	24
布屋新田砲台	28 榴弾砲	4	士官 2	8	80
	野砲	4		4	24
北島新田砲台	28 榴弾砲	8	士官 2	8	80
	野砲	4		4	24
計		28	8	46	394

備考：・天保山砲台ニ在ル佐官ハ砲兵隊ノ長トス。

- ・下士兵卒要員ノ区分即チ重砲附下士ハ要塞砲兵ヨリ、軽砲附下士ハ野戦砲兵ヨリ、兵卒ハ要塞砲兵ヨリ 71 人、野戦砲兵ヨリ 126 人、後備歩兵ヨリ 97 人トス。

上記のように備砲され、兵配備の完了した諸砲台を、北白川宮能久親王が巡視している。『能久親王事蹟』（森林太郎編、東京偕行社、明治 41 年）に、「十月九日、天保山、北島新田、布屋新田の諸砲臺を巡視せさせ給ふ。」と記されている。

この時、当然の事ながら、貸し出し中の地所も「大阪天保山砲台地今般使用候付返付之、明治廿七年八月十八日」と、返還されている。

なお、北島新田（大阪市住之江区）は大和川河口の右岸に加賀屋甚兵衛が開発着手した新田で、その西側先端部近くに砲台と観測所が設けられていた（図 2）。また、布屋新田（大阪市西淀川区）は布屋高瀬甚九郎が開拓した新田で、ここに岡山藩が安政年間に台場を築造し、15 拇砲を 6 門配備したことに始まる（写真 2）。

日清戦争は翌 28 年 4 月 17 日に講和条約が締結されるが、6 月段階においてもこれら砲台の戦闘体制は解除されなかったようで、砲台間の連絡交通路に関わる用地買収等が依然進められていた。

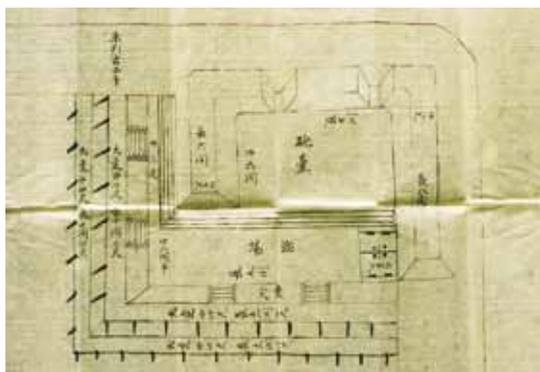
#### （4）天保山砲台のその後

そして翌 29 年になって、「大阪防禦布屋新田砲台建築事務所売却之儀ニ付伺（6 月）」、「大阪湾防禦天保山及北島新田両砲台間交通ノ為メ大阪府西成郡川南村ニアル尻無川へ臨時軍事費ヲ以テ急造橋梁架設相成候処、売却致度（6 月）」、「安治川棧橋材料下附之義ニ付伺（8 月）」などが提出され、

図2  
北島新田砲台  
「大阪府下東成郡敷津村字北島二於ケル陸軍用地位置略図」  
[JACAR (アジア歴史資料センター)  
Ref.C07072202400 (第6画像目)、  
明治40年「肆大日記4月」(防衛省防衛研究所)]を、仮製地形図「天保山」(2万分の1、明治18年測図)(参謀本部陸軍部測量局)に重ねた。



写真2  
木屋新田砲台之図  
「摂海御警衛場所并御台場御絵図」  
[池田家文庫、岡山大学附属図書館蔵]



何れも認可されている。さらに「北島新田及木屋新田ハ既ニ夫々撤去済之処更ニ天保山ハ三十二動員年度ノ終リ迄ニ悉皆撤去致候条右及移牒候也追撤去済ノ上ハ右備砲中廿八冊留弾砲六門ヲ芸予要塞来嶋E点砲台へ備附」(33年1月)とあって、順次砲台としての武装が解除されていった(図3)。

また、明治30年以降、大阪築港工事が開始されて、天保山砲台周辺が埋め立てられることになり、それに伴って大阪市が天保山砲台敷地の借用使用を陸軍に認めてもらっていた。その最中の明治37年に日露戦争が勃発したにもかかわらず、砲台跡地の継続使用が認められたことによって、砲台地周辺は完全に埋め立てられてしまった。つまり、日露戦争時には近代要塞である由良要塞が完成しており、旧砲台は全く不要となっていたのである。

築港工事の終わった砲台跡地は、明治42年に陸軍省に返却され、陸軍

糧秣廠大阪支廠が設置された（図4）。また同年、北島旧砲台も取壊されて、翌43年には大阪砲兵工廠北島新田火薬庫が新設されている（図5）。

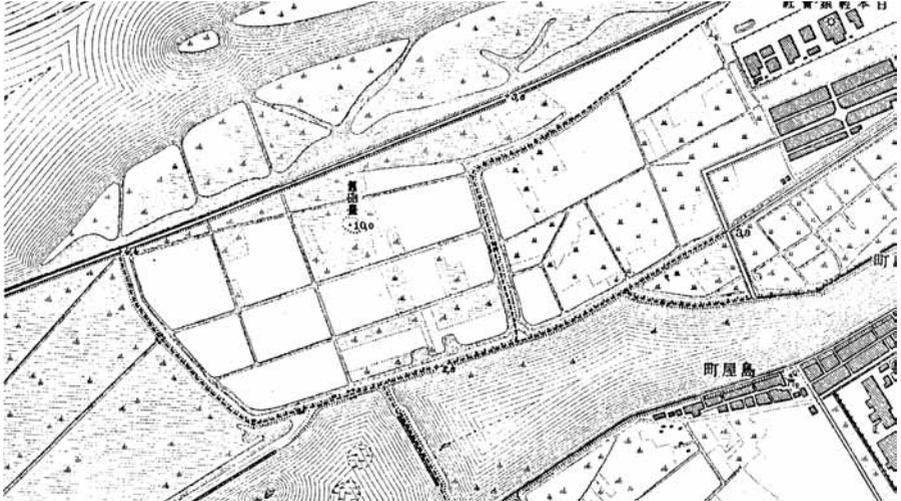


図3  
布屋新田砲台跡（図中に「舊砲臺」とある）  
「大阪西部」（1万分の1、大阪近傍14号、大正10年測図）[大日本帝国陸地測量部]

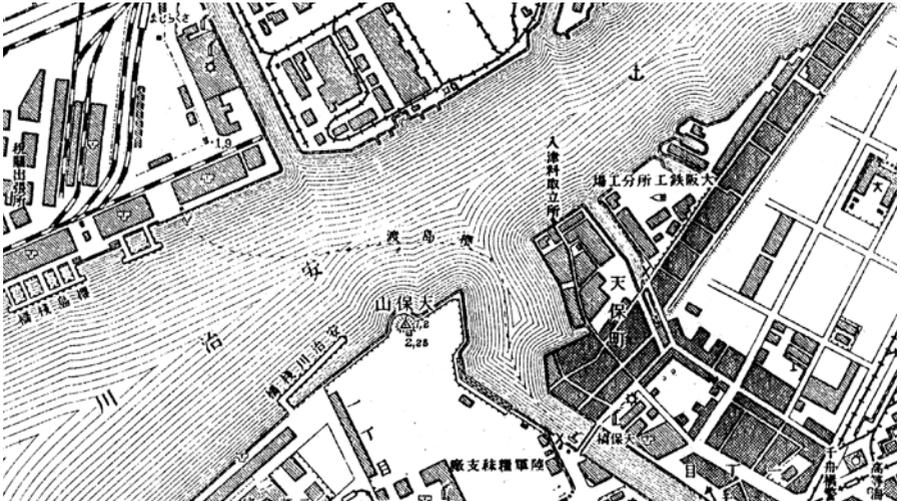


図4  
天保山砲台跡（砲台跡は埋め立てられ、陸軍糧秣支廠が設けられている）  
「大阪西南部」（1万分の1、大阪近傍15号、大正10年測図）[大日本帝国陸地測量部]

### 3. 摂海石堡塔と和田岬砲台

#### (1) 祝砲台としての活用

和田岬石堡塔（砲台）は、文久3（1863）年に徳川幕府によって川崎・西宮・今津のものと共に築造が着工されたいわゆる摂海石堡塔の一つで、慶応2（1866）年頃に完成したものである。明治5～6年頃よりその管理は大阪鎮台が行うことになるが、翌7年に石堡塔附属の小砲台（萩藩築造のものか）は廃止され、兵庫県に引渡されている（図6）。なお、西宮石堡塔の附属砲台についても同様であった（写真3）。またこの頃、各石堡塔は何れも備砲されていなかったようで、明治7年8月に大阪鎮台より新たにアームストロング砲（安式砲）が計8門交付されている。

なお、この砲は大阪大砲製造所（明治5年に造兵司から改称）にて製造されたもので、後の日清戦争で使用された安式砲とは全く異なるもので、いわゆる「6ポンド軽野砲（口径：64mm）」と呼ばれる小口径砲をまねて試作したものであったと思われる。またこの砲は配備当初からあくまでも祝砲用として用いられ、実弾は配備されなかったようである。同9年段階にお

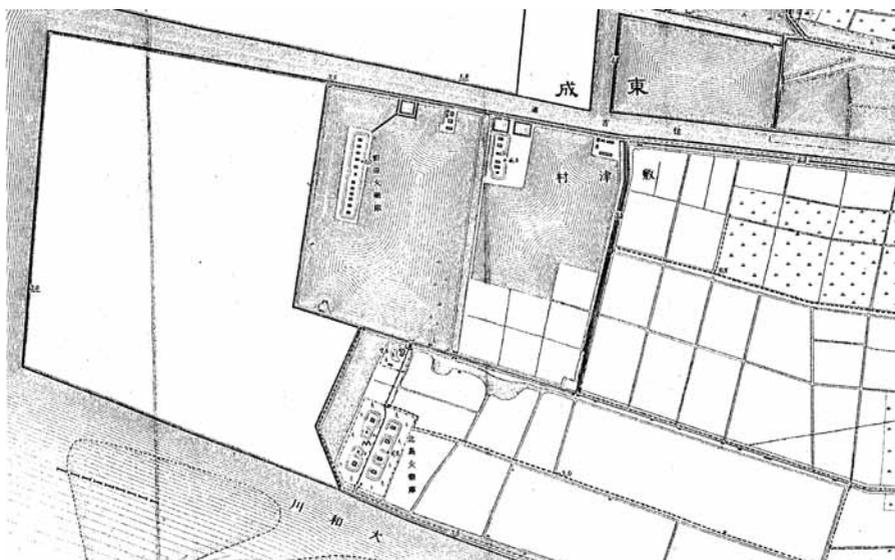


図5  
北島新田砲台跡（砲台跡には火薬庫が設けられている）  
「柴谷」（1万分の1、大阪近傍16号、大正10年測図）[大日本帝国陸地測量部]

いて、「礼砲条例御定相成候処神戸港ハ要塞ニテ礼砲スヘキ設備無之」状態であり、翌 10 年の西南戦争の勃発や、その他の砲具の配備等にも手取り、石堡塔での空砲試験撃ちが実施されたのが 11 年 7 月になってからであった。12 月に火薬が格納され、ようやく「明治十二年一月一日ヨリ神戸石堡塔ニ於テ礼砲施行候」となったのであった。

なお西南戦争では、2 月 19 日に征討の勅が発せられるが、和田岬石堡塔は官軍の弾薬集積場として一時使用されている。例えば、『西南戦役報告』に「三月二日 午後第五時神戸港ニ投錨シ同第六時上陸本町通りニ舎営ヲ設ク。三月三日 器械弾薬ヲ石堡塔ニ運輸ス。三月四日砲車ニ記号ヲ附シ弾薬ヲ石堡塔内ニ収ム」、「三月三十一日石堡塔ニ格納致シ有之候弾薬戦ノ地輸送ノ為メ取出」と記されている。

## (2) 川崎石堡塔

旧淡川河口の右岸にあった川崎石堡塔については、明治 9 年段階において、石堡塔は陸軍省用地にあったがその周辺は海軍省の管轄であった。石堡塔の維持管理のために施設拡張が必要であるとして、その接続地の借用を陸



図 6  
和田岬石堡塔と小砲台  
「兵庫神戸実測図」(5 千分の 1、明治 14 年)  
[内務省地理局発行]



写真 3  
撰津国西ノ宮図 (部分)  
[池田家文庫、岡山大学附属図書館蔵]

軍省が海軍省に申し入れている。そして同 12 年の礼砲施行に伴ってここにも砲兵が分遣され、「晴雨二不拘船舶ノ出入ヲ見分スヘキ為」に「番舎」が新設された（図 7）。

また、川崎石堡塔は神戸小野浜造船所に近く位置し、軍艦の修理に際してはその搭載火薬等の一時保管所として海軍が使用している。例えば、明治 22 年 11 月に砲艦鳳翔（長州藩が英国から購入）の火薬を一時格納したり、同 12 月に砲艦摩耶（前年に小野浜造船所で竣工した摩耶型一号艦）の弾薬を 2 ヶ月間保管したり、翌 23 年 2 月には石堡塔を大和艦（初代大和）に貸し出している。

### （3）石堡塔の修理と廃止

上記したように、祝砲台として使用された石堡塔は度々修理も行われている。例えば、「兵庫県下海岸四個ノ石堡塔修理之儀一昨十一年六月伺出陸第千二百七十号御指令ニ基キ客歳五月中該地川崎和田岬両石堡塔共加修セリト雖モ獨リ川崎石堡塔ニ在テハ数月間ヲ不經シテ頂上再ヒ破壊シ雨水

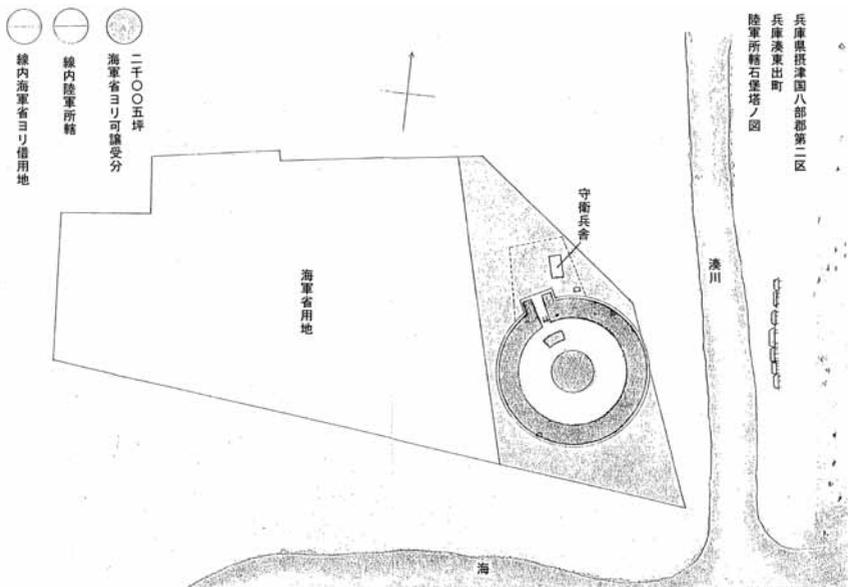


図 7  
川崎石堡塔「兵庫県摂津国八部郡第二区 兵庫湊東出町 陸軍所轄石堡塔ノ図」  
〔JACAR:C06090199600（第 3・4 画像目）明治 9 年公文備考往入巻 18 自 142 至 282  
（防衛省防衛研究所）〕

ノ点滴忽チ旧ニ復シ（中略）明治十三年一月十三日」や、「兵庫川崎石堡塔  
雨覆去八月廿五日ノ暴風暴雨ニ犯サレ大破損ニ及ヒ既ニ其全面五分ノ二有  
余東北ノケ所雨覆振付ノ基石ヲ起シ或ハ釣付鉄物ヲ折斷シ板桁ノ類ハ悉皆  
墜落（中略）、暴雨或ハ発砲ノ為メニ震動毎ニ破損墜落（中略）、和田岬堡塔  
同様ノ体裁ニ変換相成度（中略）明治十三年九月十日」などがある、祝  
砲台として使用され始めた当初は度々補修も行われたようである。

ところが、「兵庫県神戸市川崎町石堡塔之義ハ本年（明治25年）三月  
十六日塔内ヨリ出火内部ノ構造及屋蓋ニ至ル迄悉ク焼失シ周壁ナク円筒而  
已尚ホ其形状ヲ存スト雖モ十有余時間ノ長キ烈火ニ羅リ為メニ石面割裂且  
接合部分ノ欠損ヨリ大ヒナル間隙ヲ生シ就中危険部分モ少ナカラズ、加フ  
ルニ中央ヨリ上部ニ在リテハ外部燻焦甚不体裁ヲ極メ然リト雖モ今之ニ修  
理ヲ加ヘンカ夥多ノ金額ヲ要スル而巳ナラズ事ノ長大ニ涉リ、々々」とあ  
って、先ず川崎石堡塔が廃止されている。

また、同29年2月には和田岬石堡塔敷地および川崎石堡塔敷地と東京  
牛込区市ケ谷の民有地との交換が決まり、それに伴って同年6月には和田  
岬および川崎石堡塔並びに土塁・石垣も売却されている。和田岬石堡塔の  
払下げに関しては、「石堡塔御払下之願、石堡塔壺ケ所、他周囲土堤石垣共、  
右神戸市兵庫港地方字和田岬六番ノ三地上ニ有之石堡塔ノ義曩ニ歴史上ノ  
記念及土地風致上保存致度、且当会社所有水族放養場隣接ノ地ニ有之旁以

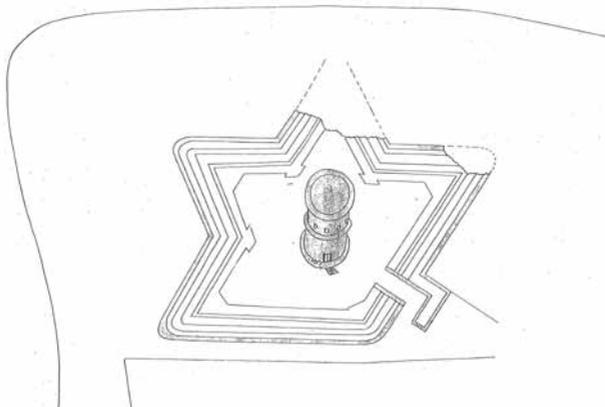


図8  
和田岬石堡塔払下伺付図 [JACAR:C03031001000 (第6画像目)、  
明治29年7月「壹大日記」(防衛省防衛研究所)]

テ御払下方又御貸与方出願、明治廿九年六月廿五日」と願書が提出されている（図8）。

一方、西宮・今津石堡塔に関しては、「兵庫県下西ノ宮今津兩砲台ノ石材払下方明治三十四年三月十九日附ヲ以テ出願ノ件詮議不相成候」とあり、同39年にも西宮石堡塔の借用願いが個人名で提出されるが、これも当初は却下されている。

しかし、同41年には両石堡塔の兵庫県への移管がようやく終わったようで、「陸軍省元所属不余地払下代収入報告書（明治41年4月23日）」（表2）に、両石堡塔の名が挙っている。

表2 陸軍省元所属不余地払下代収入報告書

位 置	種 類	坪数（坪）	単価（円）	売却代金（円）	売却年月（明治）
兵庫県津名郡岩屋町	旧砲台	444.010	0.890	395.000	41年2月～
同 上	松帆砲台	6,391.000	2.400	15,340.000	同
同 上	旧砲台	458.750	0.272	125.000	同
同県同郡洲本町	同	343.000	0.803	275.600	同
同県同郡岩屋町	同	403.745	1.500	605.590	同
同県揖保郡室津村	同	1,615.843	0.185	300.000	同
同 上	同	35.750	0.352	9.000	同
同県印南郡的形村	同	209.900	0.052	11.000	同
同県姫路市鍛冶町	元憲兵屯所	212.240	7.391	1,568.710	同
同県武庫郡今津村	石堡塔	1,134.000	5.996	6,800.000	同
同県同郡西ノ宮町	同	1,547.500	7.180	11,112.000	同
同県神戸市水木通	元憲兵屯所	175.000	20.628	3,610.000	同
					（以下、略）

なおこの報告書には、石堡塔の他に、淡路の松帆砲台や、室津・的形の元姫路藩の旧砲台の名も挙がっていることに注目される。

#### 4. 大阪湾周辺の旧砲台

##### (1) 泉州堺砲台

堺旧砲台は、旧堺港を挟んだ南北にあった。安政2年に堺奉行所の手によって築造開始されたものであり、その後、南台場については文久3年か

ら彦根藩等の手によって大改修が施され、明治維新に至っている。慶応4年の堺事件の折に、上陸したフランス兵が堺砲台を無断で測量したことも事件の一因にもなっている。

明治維新以降の堺砲台に関しては、工兵第四方面軍の管轄下にあったが、民間人が自由に立ち入ることのできる状態に置かれ、石垣・木柵などの自然崩壊が進み、度々修繕も行われている。例えば、明治10年には胸牆内の火薬庫の構造物の修繕なども行われている。また、明治22年には砲台出入口の柵門などの修理が行われているので、この段階でも依然として跡地の維持は行われていたようである。

しかし、その一方で、例えば明治21年には砲台地域濠を草木苗の培養のため貸与している。さらに、明治27年には日清戦争の戦時下にありながら、砲台地の公園としての使用許可申請が堺市から内務省および陸軍省宛に提出されている。

明治36年に第5回内国勸業博覧会の大阪での開催が決定し、それに伴っ

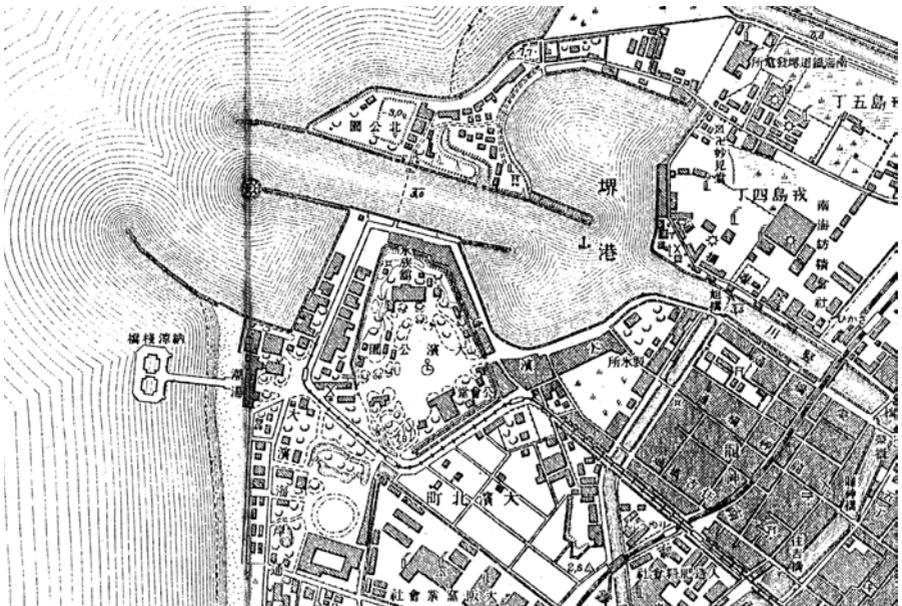


図9  
堺砲台跡（南砲台跡に水族館が開園している）  
「堺西部」（1万分の1、大阪近傍17号、大正10年測図）[大日本帝国陸地測量部]

て本邦初の本格的な水族館の設置が計画され、その設置場所として旧堺南砲台跡が候補にあがり、明治 33 年に敷地使用伺いが提出されている。そして博覧会終了後、堺市は払下げを受けて堺市水族館としてオープンしている。堺砲台はこの時に全廃されたようである（図 9）。

## (2) 紀州和歌山藩の旧砲台

紀州和歌山藩が本格的な台場築造に着手したのも安政年間以降であり、特に和歌山近郊の沿岸部および友ヶ島に集中して台場が築造された。安政年間の各台場の見取り図が『異船記』にそれぞれ描かれている。図 10 はその所在一覧図である。

明治 9 年に工兵第四方面が和歌山県下の砲台跡地の实地検分と測量を行っている。「和歌山縣下海岸砲臺之義ハ經年ノ久シキヲ以其地所疆界頗ル曖昧ニシテ其俚差置候而ハ疆界錯亂不都合之至ト被存候」とあり、また「和歌山縣下舊砲臺之儀ニ付申進和歌山縣下舊砲臺之有無是迄縣官ヨリ開申之儀無之因テ追々取調候處總計十七個有之候間先般巡回之際其實地ニ就テ取



図 10  
紀州藩築造台場の一覧(安政年間)  
(岩橋藤藏、小嶋備源、野際察、『異船記 卷 8』1856 年、和歌山県立図書館蔵)に記載分。

調候處現今ニ至テハ嘗僅ニ砲臺タルノ痕跡ヲ存スル耳ニシテ一ツモ實用ニ適スルノ分無之候得共其存廢等ニ至テハ追而何分之御詮議可有之儀ト奉存候間圖面朱綫之通夫々疆界取調圖面竝景況書等相副此段申進候也。」とあって、これには「和歌山縣下砲臺景況書」と題する各砲台跡の状況報告書が添付されている。この報告書は、紀州藩の17ヶ所の台場跡を測量・調査したものであり、各台場跡の当時の状況を図面と併せて克明に記している。調査範囲は観音崎台場以北であり、具体的には観音崎砲臺、濱之宮砲臺、出嶋砲臺、藥種畑左砲臺、藥種畑右砲臺、青岸砲臺、川口砲臺、外濱砲臺、田倉崎砲臺、海髪砲臺、雄良砲臺、藻江砲臺、配府砲臺、保古良砲臺、蒲浦砲臺、池之前砲臺、小浦砲臺の17ヶ所で調査を行っている。各砲台（台場）について、『異船記』所収の絵図面と比較すると、ほぼ同じものもあれば、全く異なるものもあり、本報の主旨とは異なるが興味深いものがある。この検討は別の機会に委ねたい。

調査の実施された明治9年段階というのは、後の由良要塞築城（明治22年起工）の十数年前であり、差し当たっての国防上の理由から、旧砲台の再利用の可能性を探る目的で行われたものであった。調査結果としては、「一ツモ實用ニ適スルノ分無之候」としているが、「存廢等ニ至テハ追而何分之御詮議可有之儀ト奉存候」とあり、実際、明治13年にその再検討が行われている。例えば、民有地となっていたものについては官有に戻す処理が行われている。具体的には、田倉崎砲臺、海髪砲臺、雄良砲臺、藻江砲臺などがそれに該当し、翌13年1月には総ての官有化を終えている。

しかし、明治15年頃から新砲台（近代要塞）建設のための現地調査が開始されると、旧砲台跡地はそのまま放置されることになった。そして、和歌山側では新砲台建設地は加太・深山地区および友ヶ島地区となり、旧砲台跡地からの転用は殆ど見られなかった。

### （3）淡路の旧砲台

阿波徳島藩の手によって淡路の由良と岩屋に台場築造工事が着手されたのは安政元（1854）年のことで、これは幕命によるものであった。後の高崎台場と松帆（尾）台場であり、両台場共に一応の完成を見たのは文久元

(1861)年のことであった。これは大阪湾沿岸の紀州藩や明石藩などの台場に先駆けるものであり、しかも淡路における台場増築、改修工事は明治維新まで継続され、最終的には15台場が竣工したとされている(図11)。

これら台場群の明治維新以降の履歴を示すものとして、明治9年の調査資料が挙げられる。表3は「明治九年二月名東縣下淡路國旧砲臺取調帳」



図 11  
淡路の台場群 (明石海峡および紀淡海峡) (城郭談話会『淡路洲本城』1995年)より

によるもので、表4の「砲臺地取調書」と共に、明治13年10月1日付で兵庫県令宛に提出されたものである（同9年8月21日に淡路国が兵庫県に合併され、名東県は廃止された）。名東県から兵庫県への官有地の引継ぎのための調査資料と思われる。

表3 明治九年二月名東（みょうどう）縣下淡路國旧砲臺取調帳  
（洲本市立淡路文化史料館所蔵）

築造年	砲台名称	惣地積	附属施設
文久元年	字波止旧砲臺	338坪	火薬庫 1.5坪
文久元年	字中濱旧砲臺	823坪	火薬庫 3坪、建屋 46.5坪
文久元年	字高崎旧砲臺	12,231坪	火薬庫 70.4坪、建屋 132.5坪
安政5年	字六本松旧砲臺	991坪	
文久元年	字生石旧砲臺	636坪	
明治元年	字小山旧砲臺	142坪	
明治元年	字丸山旧砲臺	6坪	
明治元年	字四丁目口旧砲臺	190坪	
文久3年	字松尾旧砲臺	7,320坪	火薬庫 21坪、建屋 146坪
慶応2年	字拂川旧砲臺	95坪	建屋 1坪
慶応元年	字龍松東旧砲臺	74坪	建屋 1坪
慶応元年	字龍松西旧砲臺	79坪	建屋 1坪
慶応2年	字古城山下旧砲臺	508坪	火薬庫 9坪、建屋 10坪

表4 砲臺地取調書（洲本市立淡路文化史料館所蔵）

砲台名	砲台地坪	附属施設
高崎	10,732坪	火薬庫 74坪 建屋 103.5坪 育堤木舎 45坪 糧焚出場 24坪
六本松	1,019坪	
生石	586坪	

しかし、同年11月1日付の「淡州由良浦高崎生石六本松之三砲台敷地受領之儀伺」には、「兵庫県下淡路国津名郡由良浦高崎砲台修理之儀、(中略)、淡州由良浦高崎砲台之儀ハ陸軍必用ニ付当省へ受領之見込ヲ以兵庫県へ打合」とある。また、同15年の「淡路国津名郡旧砲台地受領之義ニ付伺」によって、松尾、竜松西、竜松東、払川、洲本字波止上、の五ヶ所の旧砲台地が

陸軍に引き渡されている。つまり、明治13～5年頃には由良地区の3ヶ所、岩屋地区の4ヶ所、および洲本の1ヶ所の旧砲台地が陸軍省の管轄下に置かれ、以降は同省の手によって修繕等が行われる。

例えば、明治21年に「高崎砲台外部石垣之基礎ニ波除ケ捨石」工事などが行われている。翌22年から近代要塞の生石山砲台築造工事が開始されるが、高崎砲台については継続修繕され、さらに日清戦争後の同31年には近代要塞としての高崎砲台への大改修工事が開始、35年に竣工し、日清戦争による鹵獲品の安式砲などが配備された。

一方、松帆砲台については、例えば明治27年2月付けで、兵庫県より公園としての使用伺が提出され、その使用を認めている。また、明治41年には松帆砲台跡地は兵庫県保安林に編入され、前掲の表2に示したように淡路地区の不要旧砲台として払い下げが行われている。

## 5. まとめ

以上、幕末期に大阪湾沿岸に築造された旧砲台（石堡塔や台場など）について明治維新後の履歴を見てきた。これらのうち、再び備砲され実戦配備についたのは日清戦争時における天保山砲台などごく一部であった。和田岬砲台をはじめとする摂海石堡塔においては備砲はされたものの、祝砲台として使用されたり、火薬庫等として使用されたに過ぎない。そして、堺台場、紀州藩の台場群、淡路の台場群については建物等は老朽化等により早期に売却、撤去されている。しかしながら、多くの台場跡地については近代要塞（由良要塞）が竣工してからも、かなり長期間にわたって陸軍省が管轄し、土塁や石垣の修繕を継続して行っている。非常時における再利用の可能性を残したものと思われる。

なお、本稿は国立公文書館アジア歴史資料センター提供資料によるところが大きい。拙稿「明治初年における大阪湾の防備」（『由良要塞Ⅲ』（近代築城遺跡研究会、2011）からの抜粋であり、引用文献・参考文献の詳細については本書をご参照願います。

## 史跡 和田岬砲台の修理工事

### 1. 概 要

江戸幕府は、幕末に異国船の脅威に対する摂海（大阪湾）沿岸部の軍事強化のため、沿岸の砲台築造を建議しました。このことから大阪湾の防備計画は具体化し、西宮から兵庫にかけて今津・西宮・川崎（湊川）・和田岬の4箇所の砲台築造が決定しました。和田岬、川崎の砲台は元治元年(1864)8月に完成し、慶応元(1865)年6月に西宮砲台、翌2年に今津の砲台が完成しました。このように幕府によって防備体制が強化されていましたが、時代は倒幕に進んでいたため、防備体制が整う前に、明治維新を迎えました。このため各砲台は、その使命を果たせないまま、川崎の砲台は明治24(1891)年の火災で内部の木造部分が焼失し、翌年民間に払い下げられたあと取り壊されました。今津砲台も大正4(1915)年に民間に払い下げられたあと、石材を再利用するため取り壊されました。西宮、和田岬の両砲台は現存し、国指定の史跡に指定されています。西宮砲台は、明治17(1884)年の火災で内部が焼失し、昭和49(1974)年内部の鉄骨補強や外壁の漆喰(しゅくい)の塗り直しなどの改修工事が行われました。

和田岬砲台は、勝海舟の命により佐藤与之助が設計し(勝安房『陸軍歴史』による)、文久3(1863)年5月から、工事請負者の嘉納次郎作により、工事期間1年3ヶ月という非常に短期間で完成しました。しかし、砲台として使用されることなく、明治5(1872)年に陸軍省が払い下げを行おうとしましたが、当時の兵庫県令(知事)が保存を決定し、明治29(1896)年には和田倉庫、翌年三菱合資会社を買収されました。大正10(1921)年3月3日に兵庫県下における国指定史跡第1号に指定されました。その後、大正15年10月から昭和2年1月にかけて改修工事が行われ、鉄骨で屋根下地を造り、屋根が架けられました。その後、阪神淡路大震災や度重なる台風被害に遭いながらも創建当初の姿を多く残し、保存されています。

砲台の形状は、直径約14.5～15.2m、高さ約11mの円筒形になっています。基礎は杭を打ち、木材を敷き並べて、石を3段積み上げています。

外壁は犬走り石を敷き、延べ10段石を積み上げて、下から5段目と10段目の石は外側に張り出した形状になっています。6から7段目にかけて11箇所の砲眼（ほうがん、大砲の射撃口）と内側に木製扉がある明り取り窓が1箇所あります。内部は木造2階建、1階中央に井戸があり、半分近く火薬置所として床を張って、柵が造られています。2階の床を支える柱は、周辺の柱が約30cm角、中央に約48cm角の柱を4本建て、その上に約55cm角の梁を架け渡した上に、約48cm角の梁を放射線状に並べて2階の床を張っています。2階床の中央には、井戸の水をくみ上げるための開口部があります。

砲台の基礎や外壁には、香川県の小豆島や塩飽島（しわくじま）の花崗岩（かこうがん、御影石）が使用されています。内部の木材は、神戸周辺の山の樺（けやき）、樺（つが）、楠（くすのき）、松（まつ）、檜（ひのき）が使われています。また、木の部材どうしを留める金具や2階の鉄製の柱は、創建当初のものが残っています。



#### 古写真

撮影時期は不明ですが、屋根の構造から、昭和初年までに実施された修理の後であることが解ります。

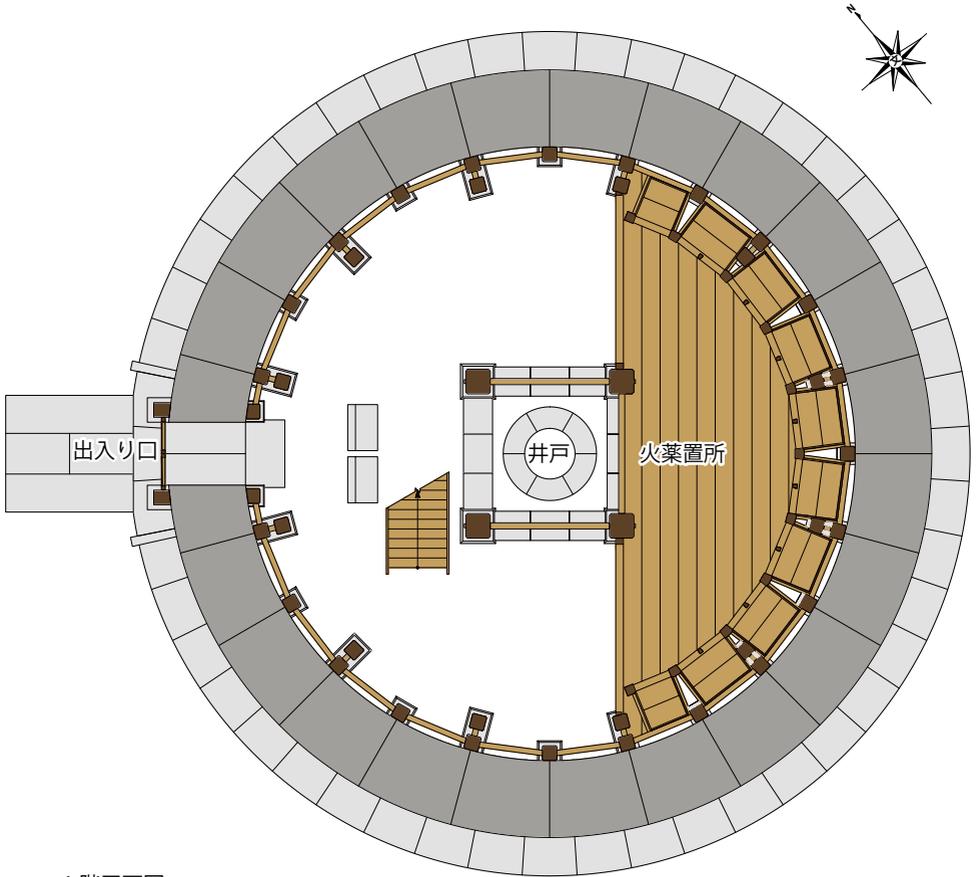
## 2. 内部の状況



1階部分解体前



1階部分解体前



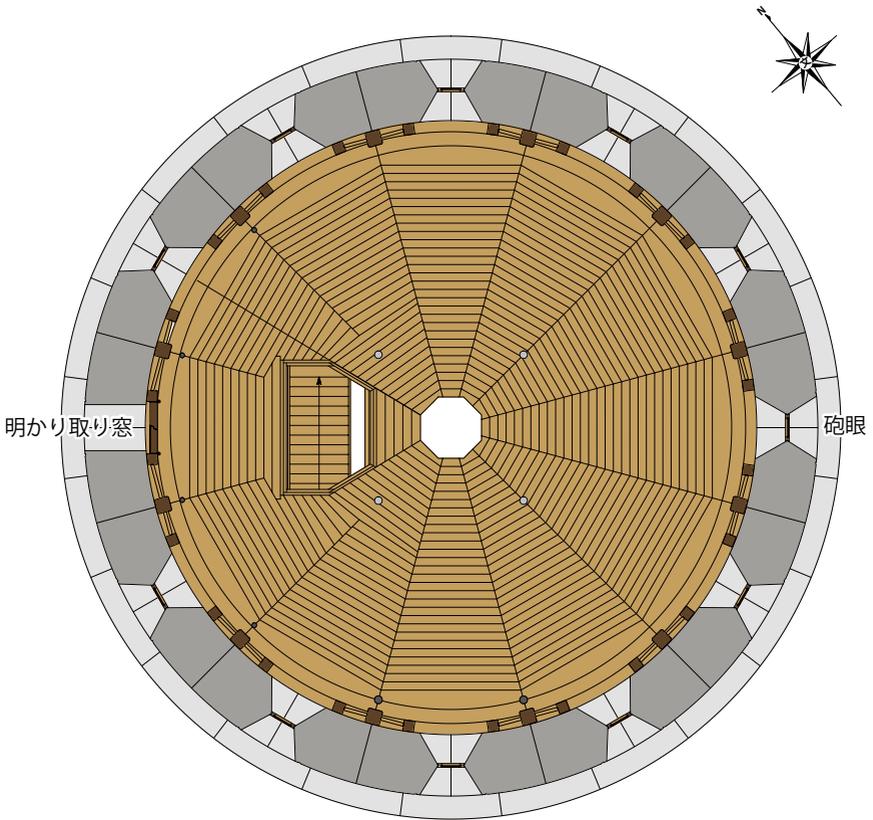
1階平面図



2階部分解体前



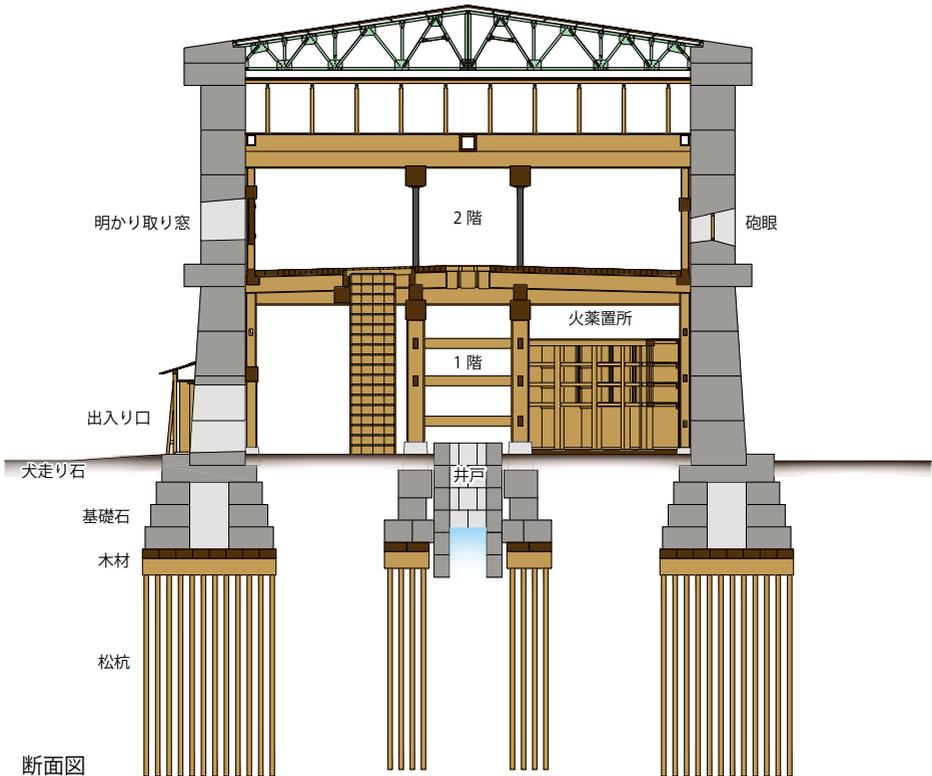
2階部分解体前



2階平面図



木造部を結合している金具類



断面図

### 3. 修理工事の概要

和田岬砲台は元治元（1864）年 8 月に完成後、約 140 年が経過し、大正から昭和の初めにかけて行われた屋根の改修工事以外は、大規模な修理工事が行われず、内部の木造部分は腐朽が著しく、崩壊の恐れがあり、早急な修理が必要となっていました。そのため、平成 19 年 11 月から国庫補助事業として国、兵庫県、神戸市の補助を受け、三菱重工業株式会社が調査工事と修理工事を行っています。調査工事は、平成 19 年度、20 年度にかけて木材腐朽調査、石の割れ調査、地盤調査などを行いました。今回の修理工事は、平成 21 年 12 月 1 日から平成 25 年 3 月 31 日までの延べ 40 ヶ月の工期の予定で、外部は部分補修、内部は全解体修理工事として行われています。

今回の修理工事では、外部の石積みは解体せずに、目地部の補修や石の割れた箇所を補修を行います。内部は、木造部分を全解体修理という方法で工事を進めます。全解体修理とは、柱や梁などの部材全てを丁寧に取り外し、使える部材は再利用し、腐朽した部分は修理し、解体した順番と逆の順番で組立を行っていく方法です。一般的に解体するという事は取り壊してしまうイメージですが、文化財の修理では、基本的に使われていた材料や部材をできる限り再利用することが前提になっています。そのため、部材ひとつひとつに番付札（ばんづけふだ、解体した部材の位置を示す札）を取付けます。柱と梁などを留めている金具は各寸法を測り、つくられた時代の判別を行います。木材の全ての部材は、各寸法を測り、材料の種類、どんな種類の工具で加工されているかを調べ、材料の腐朽の度合いにより使える部材は再利用、腐朽した部分については根継（ねつ）ぎや短木（はぎき）等の補修、使えない部材については同じ種類の木材を新たに加工したものを用います。また継手（つぎて）、仕口を調査し、材料の時代別の判断を行います。これらの調査により創建当初どのような寸法・工法・仕様で造られたのか、その後いつ、どのような修理が行われたのかを解明します。最後に調査した結果をまとめ、今回の工事の記録として「修理工事報告書」という本を作る予定です。（財団法人建築研究協会 伊藤誠一郎）

## 和田岬砲台の修理履歴

修 理 年 月	修 理 箇 所
大正 15 (1926) 年 10 月 ～ 昭和 2 (1927) 年 1 月	屋根改修工事 ・ 屋根葺土の撤去 ・ 屋根鉄骨トラス新設
昭和 33 (1958) 年 8 月	シロアリ駆除
昭和 45 (1970) 年 1 月～ 3 月	屋根及び石積みの部分修理 ・ 屋根シート防水に変更 ・ 屋根鉄骨トラス塗替え ・ 石積み亀裂部補修
平成 4 (1992) 年 1 月	部分修理 ・ 入口部分補修
平成 6 (1994) 年 1 月	シロアリ駆除
平成 8 (1996) 年 2 月～ 3 月	災害復旧修理 (阪神淡路大震災) ・ 石積み亀裂部補修 ・ 出入口修理
平成 9 (1997) 年 2 月	災害復旧修理 (台風 12 号) ・ 屋根シート防水修理
平成 10 (1998) 年 2 月	災害復旧修理 (台風 9 号、強風) ・ 屋根シート防水修理
平成 11 (1999) 年 11 月	災害復旧修理 (台風 18 号) ・ 屋根シート防水修理
平成 16 (2004) 年 1 月	部分修理 ・ 出入口扉部分補修
平成 17 (2005) 年 3 月	災害復旧修理 (台風 16 号、19 号) ・ 屋根シート防水修理
平成 17 (2005) 年 6 月	部分修理 ・ 砲台窓欠損部補修
平成 18 (2006) 年 1 月	部分修理 ・ 砲台窓欠損部補修

## 年次別修理工事概要

年 度	修 理 工 事 内 容
平成 21 年度	・ 仮設工事 ・ 木部解体 ・ 補足木材 (樺材) 一部購入 他
平成 22 年度	・ 古材繕い補修 ・ 補足木材 (樺材、桐材、楠材) 購入 ・ 石積み補修、目地補修 他
平成 23 年度	・ 古材繕い補修、新材加工 ・ 木部組立 ・ 1 階床の土間叩き補修 他
平成 24 年度	・ 屋根修理 ・ 入口復元 ・ 設備工事 ・ 周辺整備 他

## 〈コラム〉 現れた砲台の床面

今回の修理工事では、内部の木造部解体にあわせて、床面の掃除を数十年ぶりに行いました。これは、神戸市立博物館が所蔵する「和田岬・湊川砲台関係史料」の中にある絵図「石堡塔火薬室之図」に描かれた水桶や押入れなどの施設の痕跡が残っていないかどうかを確認するために行ったものです。厚いところでは10cmちかく積もったちりやほこりを丁寧に取除くと、全面にきれいな叩きの床面が現れました。残念ながら当初の目的であった水桶の台石や押入れなどの痕跡は見つかりませんでした。入口から入ってすぐのところで、2階に上がる梯子の台石が残っていました。火薬庫側では『和田岬御台場御築造御用留』に記載のとおり根太石48個が並び、石造りの溜櫛が1箇所ありました。

また、阪神・淡路大震災の際、砲台のすぐ南側で液状化現象が起きたのですが、叩きの床面にひびはまったく見られませんでした。しっかりした土台と固く積もったちりやほこりのおかげでしょうか。

ところで、2階に設置された大砲の発射後、1階の井戸から水をくみ上げて、砲身を冷やす予定であったようです。まかれた水が壁際に流れるように床面は外に向かって傾斜しており、水は壁際に掘られた溝と3箇所の孔から銅管を通して階下へ流れる仕組みになっていました。そして、1階に落ちた水は火薬庫の床下に作られた石造りの溜櫛に集められ、石造りの樋を通して石堡塔の外へ流れ出るようになっていたのです。今回の掃除で



厚く積もったちりとほこり

1階の四天柱の外側四周と火薬室と入口側を隔てる「框下石」（かまちしいし）沿いに溜枳につながる溝が見つかりました（溝については、明治43年刊行の『築城史料』に収録されている「川崎石堡塔之図」に見られます）。排水路についても石堡塔の外にさらに石造りの樋が続くことが確認されています。

床面や排水路のつくりについては詳しい記録が残っておらず、今回の掃除で明らかになったことは少なくありません。樋がどこまで続くのかについては今後の整備のなかで調査を進める予定です。

修理工事完成後は、ちりとほこりのおかげできれいに残された床面を保存し、見学できるような工夫を検討中です。（松林宏典）



清掃後の砲台床面

# 明治期における和田岬砲台

---

2011年12月24日

- 編集：神戸市教育委員会
- 発行：神戸市兵庫区役所
- 協力：三菱重工業株式会社 神戸造船所
- 印刷：デジタルグラフィック株式会社